学生寮への教育的期待
—お茶大 SCC の実践と課題—

耳　塚　寛　明
（お茶の水女子大学理事・副学長）
桂　　瑠　以
（川村学園女子大学文学部）

The Educational Expectations of a Residence Hall: Ochanomizu University SCC's Practice and Challenges

Hiroaki Mimizuka
(Trustee and Vice President, OCHANOMIZU University)
Rui Katsura
(Faculty of Liberal Arts, Kawamura Gakuen Women's University)

Summary

There are two residence halls at Ochanomizu University: "Koishikawa Hall," which is mainly for graduate students, and "International House," for undergraduate and international students. In 2011, a new residence hall, "Ochanomizu University Students Community Commons (Ochanomizu University SCC)," opened for first and second year students. Ochanomizu University SCC is a residence hall equipped with an educational function to embody the policy "live together and grow together." It offers students a range of educational support services, including a student support program and a residence hall advisor. These support programs aim to give students the wherewithal to grow together in a spirit of co-existence and mutual support. As to the effects of this initiative, it is still in its trial stage. We therefore report here on the Ochanomizu University SCC initiative and its effects, by presenting case studies and survey results.

キーワード：教育的学生寮、学生支援プログラム、学生寮調査
Keywords: educational residence hall, student support program, residence hall survey

1. お茶大 SCC の理念と概要

お茶の水女子大学は国立女子大学としての使命を果たすべく、グローバル女性リーダーの育成とリーダーシップ教育を重視し、学生支援やキャリア教育を含めた教育改革に取り組んできた。リーダーシップ教育の理念は、ひとりひとりが知を備えて他者と関わり、異質な他者を理解することによって自らを磨き成長するところにある。

お茶の水女子大学はこの考え方を実践する空間として近年相次いで「二つのコモンズ」を設置した。第一に、2007年に附属図書館を改修して整備した「ラーニング・コモンズ」。第二に、本稿で紹介する新たな学生寮としての「お茶大 SCC」（Students Community Commons）である。本章では、まず設置に至った経緯、理念と概要を述べる（なお以下は、「高等教育研究者としての学術的論文」ではなく「高等教育実践者としての報告」である）。

(1) 新タイプの学生寮

お茶の水女子大学にはすでに、主として大学院生を対象とした小石川寮と、留学生および学部学生を対象とした国際学生宿舎という、二つの学生寮があった。2009 年 4 月、羽入佐和子新学長のもとで、新しい学生寮のコンセプトと設計案づくりがはじまった。耳塚は担当理事としてこの作業に参画した。

学生寮は、学生に安価で安全な住環境を提供することを目的とする。学生への経済的支援施策のひとつである。民間アパート賃貸料の市場価格と寄宿料の差額分が経済的な学生支援に相当すると考えれば、学生支援上の経済効果は授業料減免に勝るとも劣らない。保護者の負担軽減にも大きく寄与する。

だが同時に、大学が希少な財源を投入して新寮を建設する以上、たんなる経済的支援策にとどめるのはいささかもったいない。欧米のドミトリーの伝統やわが国の旧制高等学校の例が物語るように、学寮は人間形成機能をも担うポテンシャルを持っている。今どんな学生寮が必要なのか。

耳塚が属する世代にとって国立大学の学生寮といえば相部屋しか想像できなかった。加えて、（かの北大恵迪寮のように）住環境としては劣悪なイメージがつきまとった。その後文部省が学生運動対策を加味して学寮政策を“個室主義”へと転換したこともあり、現在ではバス・トイレを備えた個室学生寮が一般的である。学生寮の、大学による管理への移行、個室化などの政策転換については、鈴木・元岡・桂（2012, p. 20）に詳しい。

(2) ともに住まいともに成長する

新寮を設計するために、教員と事務職員混成のワーキング・グループを立ち上げ、そのコンセプトから議論することにした。一般的な趨勢に従えば、個人生活を満喫できる快適な個室中心の設計にすべきであったろう。大学経営協議会の委員や学内教員からは、学生のニーズを調査し、それに沿った設計にすべきだという強い意見が出された。もっともである。だがニーズ調査をすれば個室に落ち着くことは目に見えている。それが今後数十年使用する学生寮としてもっとも優れたものなのか疑問が残った。第一、プライベートスペースの良質化を主眼とする学生寮を大学が作るのであれば、民間の学生会館なりアパートと提携し、あるいは業務委託したほうが、はるかに良質化と効率化が期待できるだろう。厳しい大学財政上の負担軽減にもつながる。

ワーキング・グループでは、早々に個室主義を捨て「ともに住まいともに成長する新しい学生寮」を方針とすることにした。すでに完成していた図書館のラーニング・コモンズに次ぐ、第二のコモンズとして学生寮を位置づけた。いまの学生たちの多くは、かつてとは比較にならぬ「家族の庇護」のもとで成長している。入卒業式に出席する保護者の数は入学学生の倍を上回る。入学前のオープンキャンパスへの保護者の出席数もうなぎ登りで、子どもより積極的に質問する親が目立つ。加えて、高等学校をはじめ強力な「学校の庇護」のもとにも置かれている。学生たちを見ていると、大学の教員に対しても「きめ細かな」指導を期待していることがよくわかる。入学早々、時間割を組む相談に乗って欲しいと教授の研究室を訪れる学生も珍しくない。高校までの手取り足取り指導の効果である。もはや日本の青年期は、自律・自立を促す人間形成空間を欠いているのではないか。大人たちの庇護から解放された場、「他者との共生を強制する場」が必要ではないのか。

そのような共生の場として学生寮を建設することは、近年大学に求められている「就業力」育成の点でも有効に働くと考えられる。就業力とは就職後に役立つ実学的な専門知識・技能だけを意味するわけではない。異質な人々と協働・共生する中で公共的な課題を発見し、それを解決するために多様な知識やスキルを身につけ自在に発揮する力を意味するものと考えている。いかに学力が高くとも、それが現実的な他者との協働の中で発揮されなくては、持っていないも同然である。

(3) 五人で一つの“ハウス”に住む

そこで、学生寮を「五人で一つのコミュニティ」（“ハウス”と呼ぶ）から構成し、各ハウスに、共用のキッチン、トイレ（2）、バス、リビングを設置し、これら共用スペースの周囲に鍵のかかるプライベートスペースを配置することにした。個室には 、ベッド、机、クローゼット、書棚、エアコンがあり、インターネットに接続できる。必要最低限の設備を備えてはいるが、個室から共有空間へと学生を「追い出す」設計が貫かれている。

これらは、新しい学生寮のコンセプトを物理的な空間として表現したものだが、あくまでも器、ハードウェアに過

ぎない。実際に他者との協働・共生を実現し、またコミュニティ生活にともなう問題を解決するためにはそれ相応の仕組み（ソフトウェア）が伴わねばならない。そのため、学寮アドバイザーを置き、また学生同士の交流を促す各種行事、寮生による自主企画を支援する組織、広い視野からさまざまな学習を可能とする教育プログラムなどを提供することにした。

2011年4月、新入生と2年生約50人を迎えて、新しいコンセプトを担うお茶大SCCが開寮した。私たちの試みが期待通り功を奏するかどうかはわからない。しかし、人間形成空間の変容に対して手をこまねいているのではなく、新しい仕組みを実験的に進めていくことは意味があるだろう。学生たちによって「共に学び共に住まう」寮の伝統が根付いていくことを期待している。

図1　お茶大SCCのハウス

2. 学生支援プログラム

お茶大SCCでは、学生同士の交流を促進させることを目指して「学生支援プログラム」が設けられている。このプログラムは、他者との交流やコミュニケーションを通して、豊かな人間関係をはぐくみ、共に学び合うことをコンセプトとするもので、具体的には、1）寮生同士の交流を促進させるための「交流プログラム」、2）寮生自身が主体的に企画・活動し、共に学び合うための「自主企画」、3）大学とは異なる寮独自の学びの場である「学修プログラム」の3つを柱としている。そして、これらの様々な活動・交流を通して、他者と助け合いながら、主体性・自立性をもった人格を養うことを目指した支援を行っている。そこで次章では、平成23年度の学生支援プログラムの取り組みを報告する。

図 2　学生支援プログラム

3. 平成 23 年度「学生支援プログラム」の取り組み

本章では、「学生支援プログラム」の 3 つのコンセプトに基づき、平成 23 年度に行われた活動を報告する。

(1) 交流プログラム

交流プログラムは、寮生同士の交流を促進することを目的としたプログラムである。具体的には、寮生活に必要な知識、役立つスキル、寮生が楽しく取り組めるレクリエーションなどを、学寮アドバイザーが各関連機関と連携して提供している。平成 23 年度には、「新入生オリエンテーション、ハウス長オリエンテーション（4 月実施）」、「チームワーク作りのためのワークショップ（4 月）」、「ハウスの表札づくり（5 月）」、「コミュニケーションを円滑にするワークショップ（9 月）」、「新年の抱負を考えるワークショップ（1 月）」、「1 年の振り返りと来年度に向けたワークショップ（3 月）」などを実施した。

図 3　新寮オリエンテーション、ハウス長オリエンテーションの様子

これらの交流プログラムを通しての成果と課題として、以下の 3 点が挙げられる。

1 点目に、交流の基礎として、寮生活を通して自立的な生活を身につけていくことが必要であり、その支援もあわせて行っていくことが必要と考えられる。このような課題を踏まえ、平成 24 年度には、清掃指導のワークショップを取り入れたり、門限の徹底を行い、基本的な生活習慣を身につけるための支援も実施している。

2 点目に、交流プログラムを通じて、ハウス内、同学年などの交流が活性化したことは成果といえるが、一方でハウス間での交流が少ないため、ハウス間での関わりを促す仕組みを作ることが課題と考えられる。

3点目に、ほとんどの交流プログラムは、学寮アドバイザーを始めとした大学のスタッフが先導する形で行っており、寮生同士で自発的に声を掛け合って交流する機会が少なく、受け身になりがちなことが挙げられる。そのため、課題設定を工夫して、寮生が受け身ではなく、自発的に参加して、寮生同士で関わろうとする場を作っていく必要があるといえよう。また、始めから意欲的に交流する寮生は一部であるため、まずはコアメンバーを育て、コアメンバーから他の寮生へ働きかけていくような流れを作ることも必要である。それにより、強制されて参加するのではなく、寮生同士が誘い合って活動を広げていく場を提供していくことが課題といえよう。

(2) 自主企画

自主企画は、寮生主催のプログラムで、ハウスごとにイベントや活動を企画して実施する。また、他のハウスの活動にも積極的に参加して、寮生同士の関わりを活性化させることを目指している。平成23年度には、「ウェルカムパーティ（4月）」、「映画上映会（8月）」、ハウスごとに1つずつ企画を出しあって実施した「寮祭（10月）」、「東京探検ウォーキング（11月）」、「鍋パーティ（12月）」、「お茶大SCC映画撮影と上映会（3月）」などを実施した。

図4　寮祭の様子

これらの自主企画を通しての成果と課題として、以下の2点が挙げられる。

1点目に、自主企画とは言うものの、ハウスによっては義務的に行っているハウスや、企画が主体的に立てられないハウスもみられた。そこで、企画を立てる際にも、教職員が適宜サポートを行い、寮生活や関心に結び付く活動を探して、寮生の意欲を引き出していくことが必要と考えられる。

2点目に、行われた企画の多くは、寮内の仲間内での活動に留まるものが多く、寮外に出ていく活動に広がりにくいことが挙げられる。そのため、ワークショップ等で企画を考える会を開き、「東京探検ウォーキング」、「他大学の見学ツアー」など、外に出ていく企画を立てて、外に目を向けるよう、促す必要もあるといえる。

(3) 学修プログラム

学修プログラムは、大学が提供するプログラムであり、本学の教員が年4回講義を行い、講義の約1ヶ月後にハウスごとに学修成果を発表する発表会を行う。平成23年度には、第1回に羽入学長、第2回に耳塚教育機構長、第3回にSCCの設計に携わった元岡准教授による講演を行い、第4回には寮生の自主企画として、お茶大OGとのキャリアに関する懇談会を実施した。

図 5　学修プログラムの様子

これらの学修プログラムを通しての成果と課題として、以下の 3 点が挙げられる。

1 点目に、学修プログラムは、義務的に行っている意識が強く、学修の深め方もハウスによって差異があり、全般的に学修が深まりにくい点が課題と考えられる。そのため、どんな形式や内容なら意欲的に取り組めるのかを寮生と共に考え、進め方を修正しながら活動していった。その結果、平成 24 年度には、発表会の場をディスカッションに変更し、ディスカッションを円滑に進めるため、担当ハウスが関連資料の収集や、ディスカッション・テーマの設定などを行い、議論を深めるよう工夫している。

2 点目に、学修プログラムの出席率は、各回半数程度と低く、また出席者が固定化してしまうことが挙げられる。そこで、寮生との話し合いの結果、欠席の際には欠席理由を示す欠席届を提出するルールを導入した。その結果、24 年度の出席率は全寮生の 7 ～ 8 割程度となり、寮生の意識も高まってきた様子がうかがえる。

3 点目に、学外の講師への依頼をする際に、依頼の仕方が分からないなど、寮生が一から交渉を行うことが難しいことが挙げられる。そこで、学寮アドバイザーや関連する教職員が講師の仲介をしたり、依頼状の書き方を指導するなどして、できるだけ寮生が主体的に学外との交渉事に取り組めるように支援を行っている。

(4) まとめ

ここまで、平成 23 年度の学生支援プログラムを概観してきたが、これらのまとめとして、以下の点が挙げられる。

まず、全てのプログラムに共通して、寮生の主体性を引き出す工夫が必要であるといえる。そのために、始めは様々な仕掛けを用意する必要があり、さらにその後の状況に合わせて、寮生の声を反映させながら修正を重ね、寮生の自主的な意欲・活動をサポートしていくことが大切であろう。

また、寮生が自分たちで寮をよりよく変えていこうとする意欲を汲んで、寮生の意見を取り入れていくことも必要と考えられる。一例として、学修プログラムの進め方を大幅に修正したことや、寮生からの要望で新たに「清掃指導のワークショップ」を取り入れたことなどが挙げられる。その過程で、寮生同士、また寮生と大学の意向との衝突が起こることもあるが、その都度、話し合いにより、解決・改善しながら進め、お茶大 SCC の文化を共に作っていくことが必要ではないかと考えられる。

4. 学生寮調査の報告

(1) 目的

次に、学生寮調査について報告を行う。お茶の水女子大学には、大学院生を対象とした小石川寮（定員 80 名、自治寮）と、学部生及び留学生を対象とした国際学生宿舎（定員 400 名、自治寮）という 2 つの既存寮があり、さらに平成 23 年度より「お茶大 SCC」が開寮した。これら 3 つの学生寮は、対象とする学年や寮の規模、立地等の違いの他、小石川寮、国際学生宿舎は個室型寮である一方、お茶大 SCC は、5 人で 1 つの「ハウス」を形成し、ハウスでの共生・協働をするルームシェア型寮であり、コンセプトも異なっている（3 つの寮の詳細については、赤坂（2010）、鈴木・

元岡・桂（2012）を参照）。こうしたコンセプトの違いにより、各寮での生活実態や満足度にも違いが生じる可能性があると考えられる。そこで本章では、3つの学生寮の寮生を対象に、生活実態や満足度を調査して、比較検討を行う。

（2）方法

1）調査時期と調査対象者

2011年11月～12月に、お茶の水女子大学学生寮寮生515名を対象として調査を実施した。有効回答数は183名（35.5％）であり、各寮での内訳は、小石川寮寮生24名（36.3％）、国際学生宿舎寮生133名（33.2％）、お茶大SCC寮生26名（53.0％）であった。

2）調査方法

調査対象者に個別記入形式の質問紙を配布し、各学生寮に回収箱を設置して、回収を行った。

3）調査項目

「施設・設備に関する満足度」10項目、「寮費や寮の規則に関する満足度」6項目、「寮内の対人関係」3項目について回答を求めた。以下に主な結果を抜粋して報告する（詳細は、桂（2013）を参照）。

（3）結果と考察

1）施設・設備の満足度

居室や以下の設備への満足度について尋ねた。その結果、寮ごとに見ると、小石川寮では浴室、トイレの満足度は高いものの、居室、補食室の満足度は低く、国際学生宿舎では全般的に満足度が低く、お茶大SCCでは全般的に満足度が高いことが示された。満足度が低い理由として、自由記述では、居室の狭さや古さ等の設備の問題や、浴室や補食室の使い方が悪い、騒ぐなどの迷惑行為等の使い方の問題が挙げられた。このことから、設備と使い方の両方の改善を行っていくことが求められているといえよう。

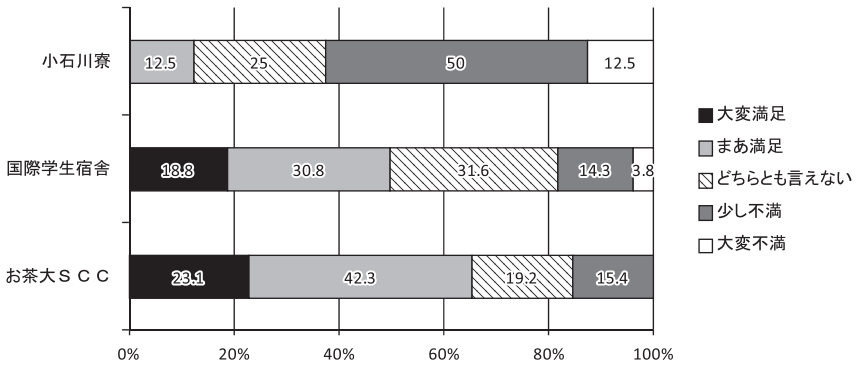

図6　施設・設備の満足度：居室全般（広さ・明るさ・清潔さなど）

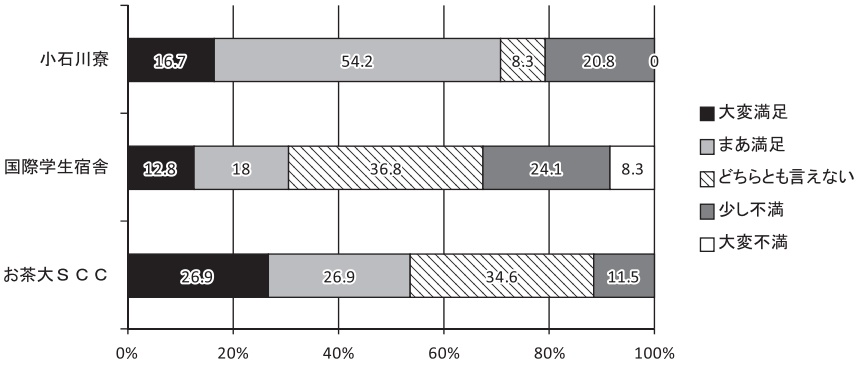

図7　施設・設備の満足度：浴室

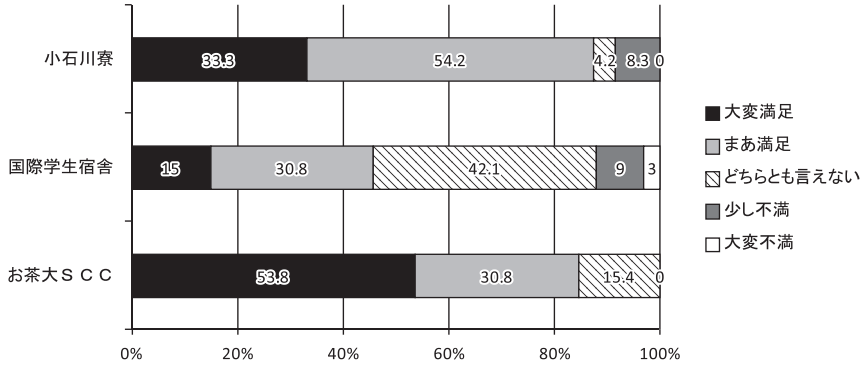

図 8　施設・設備の満足度：トイレ

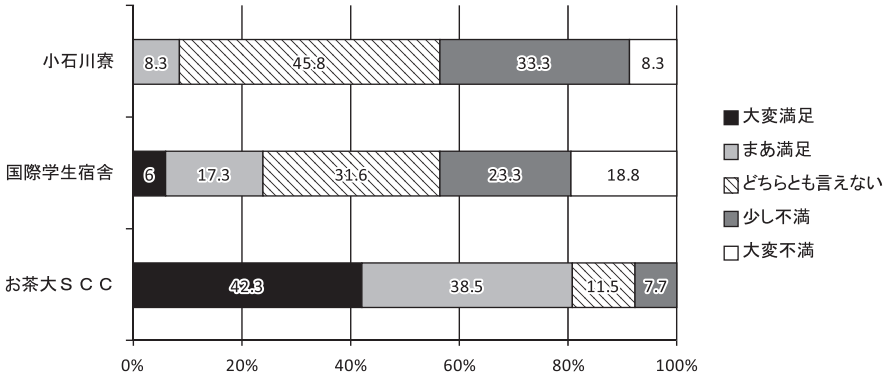

図 9　施設・設備の満足度：ハウスリビング（SCC）・補食室（国際・小石川）

次に、以下の共有スペースへの満足度を尋ねた。その結果、寮ごとに見ると、お茶大 SCC では全般的に満足度が高い一方、小石川寮、国際学生宿舎では、特に洗濯室の満足度が低いことが示された。不満足な理由について自由記述を見ると、「使い方が悪く、汚い」「乾燥機に入れっぱなしの人がいて使えないことがある」など、使用の問題が挙げられた。

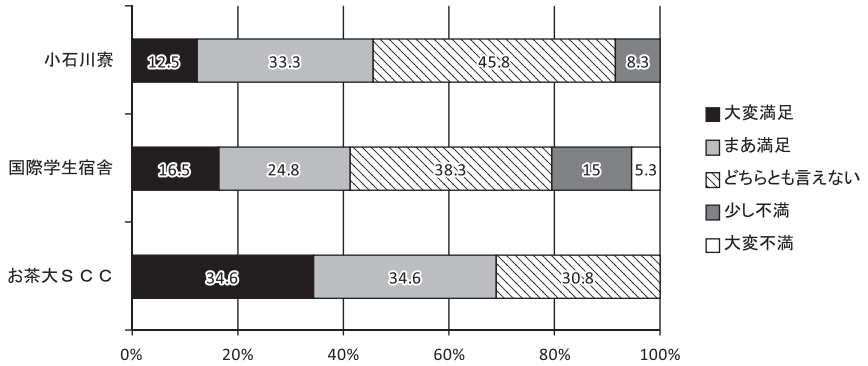

図 10　施設・設備の満足度：洗濯室

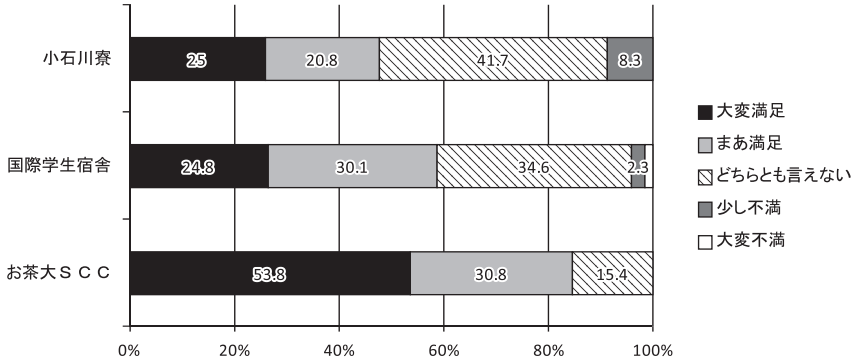

図 11　施設・設備の満足度：共有ラウンジ・ロビー・ホール

2）寮費や寮の規則の満足度

寮費、寮の規則の満足度を尋ねた結果、寮費の満足度は全般的に高い一方、寮の規則の満足度は、お茶大 SCC では 53.9％、国際学生宿舎では 42.1％、小石川寮では 29.2％が「大変満足」及び「まあ満足」と回答していることが分かった。不満足な理由として、自由記述では、門限、寮費などの規則の改善や、設備や備品の使用のルールが守られていないといった使い方の問題が挙げられており、こうした規則について、寮生のニーズも聞きながらルールを見直し、明示していく必要があると考えられる。

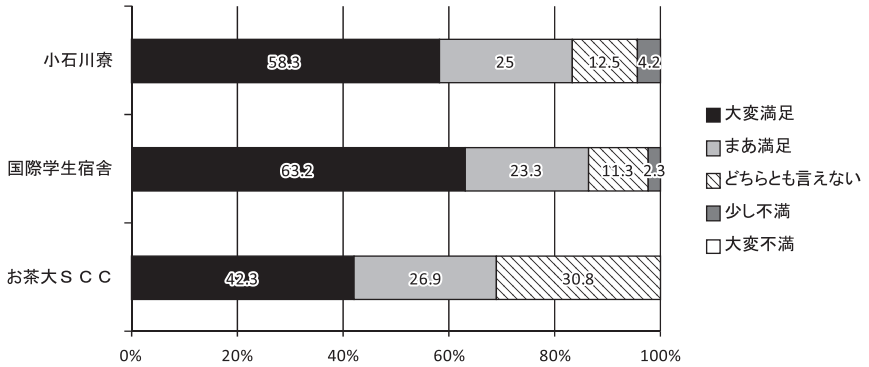

図 12　寮費の満足度

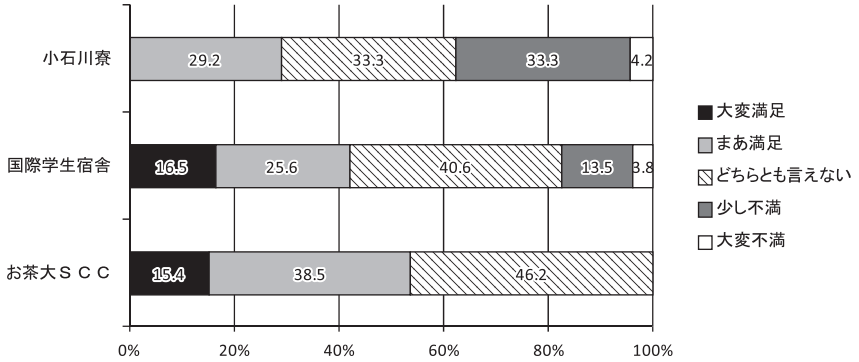

図 13　寮の規則の満足度

3）寮内の対人関係

寮内での対人関係について、以下の交流をどのくらい行っているか尋ねた。その結果、全般的に、お茶大 SCC では交流が多く行われている一方、小石川寮や国際学生宿舎では、補食室などの共有スペースで一緒に過ごす機会がと

てもあると回答した者はそれぞれ16.7％、9.8％であり、行事やパーティーなどを一緒に楽しむ機会がとてもあると回答した者はそれぞれ4.2％、4.5％で、こうした交流の機会が少ないことが分かった。これは、それぞれの寮の特色を反映しているものと考えられるが、小石川寮や国際学生宿舎でも、行事やパーティーを行う機会がもう少しあったほうがいいという自由記述も見られることから、寮内で希望者を募って交流する機会を持つこともよいのではないかと考えられる。

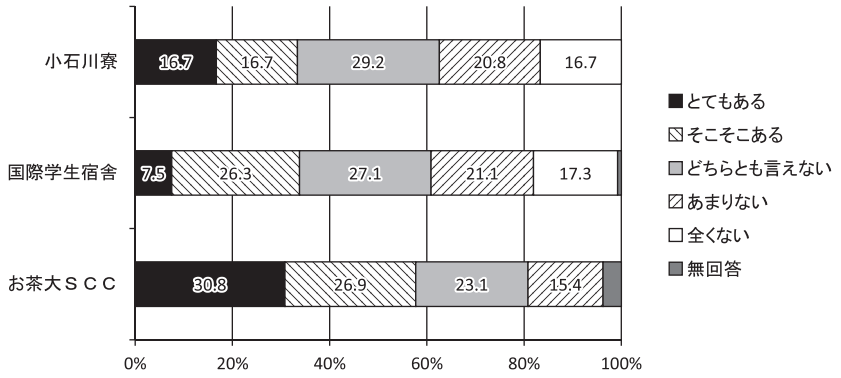

図 14　寮内の対人関係：世間話などをする

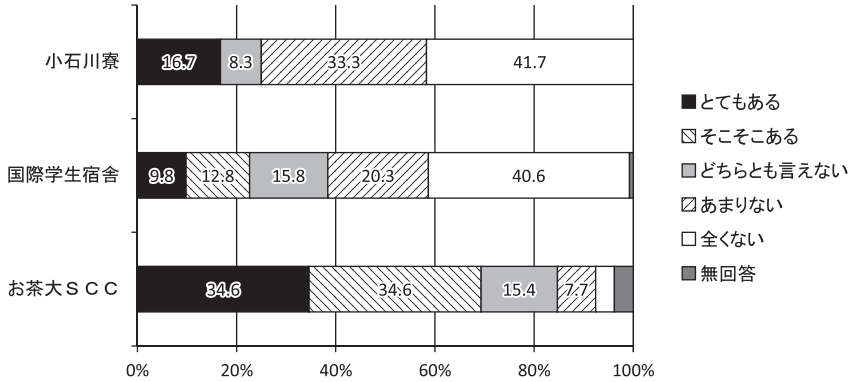

図 15　寮内の対人関係：補食室（ハウス）などの共有スペースで一緒に過ごす

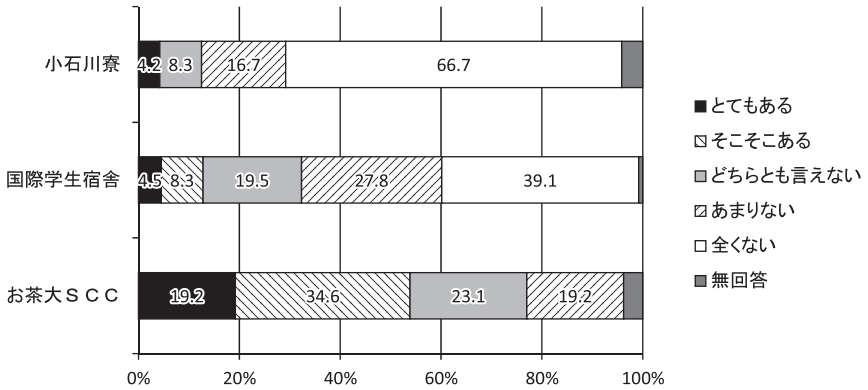

図 16　寮内の対人関係：寮の行事やパーティーなどを一緒に楽しむ

（4）まとめ

本章では、3つの学生寮の寮生を対象に、生活実態や満足度を調査して、比較検討することを目的とした。その結果、主に以下のことが示された。

まず、寮の施設・設備の満足度は、お茶大SCCでは全般的に高く、国際学生宿舎や小石川寮ではそれに比べて低い傾向が示された。また、国際学生宿舎や小石川寮では、使い方の問題も指摘されていることから、設備の拡充にあわせて使用マナー等も呼びかけていく必要があると考えられる。

さらに、寮の規則・寮費等の情報は、多くの寮生が認知しているものの、特に小石川寮では、寮の規則に対する不満や、設備・備品の使用に関する不満が多いことが示された。このことから、寮生のニーズも踏まえつつ、規則の必要性を説明し、明示していく必要があると言える。

また、寮内の対人関係は、お茶大SCCでは様々な交流が行われている一方、国際学生宿舎や小石川寮では、交流の機会が少ないことが示された。これは、各寮のコンセプトを反映していると考えられるものの、国際学生宿舎や小石川寮でも希望者を募り、交流する機会を設け、今後は、3つの寮の交流を促していくことが課題と考えられる。

5. 今後の課題

本稿では、お茶大SCCの理念や概要及び、それに基づく取り組み、学生寮調査より寮生の生活実態や満足度などの検討を行った。最後にこれらを踏まえ、お茶大SCCの今後の展望について述べる。

今後の課題の1つとして、寮生の主体的な交流を発展させていくことが挙げられる。現状では、ハウス内での交流は保たれているものの、より広い、ハウス間、他の学生寮との交流は活発とはいえない。そのため、今後も寮内外での交流が促進する活動を取り入れていき、そうした活動を寮生が主体的に切り開き、その中で、実践的な学びを経験してほしいと考えている。さらに、学生寮間での交流に留まらず、お茶の水女子大学を含む、地域・社会の中での共生へと発展させていくことが課題と考えられる。また時には、葛藤経験が共生、成長につながることも多くあるため、葛藤場面に直面した際、自分たちで考え、乗り越えられるよう、主体性を育む支援を行うことが必要と考えられる。

そのためには、特に中核的な人材を育成していくことが必要であろう。その試みの一つとして、平成25年度よりSCC-RA制度を設けている。これは、お茶大SCCの理念である「共に住まい、共に成長する」ことを目指し、上級生4名が寮に居住し、寮生自身が寮生を支援する制度である。これにより、共に住む寮生の目線でのより細やかな支援が可能となり、大学教職員とは異なる立場から寮生同士でのピアサポートが行われることを目指している。さらに、今後は、留学生を含めた国際交流ハウスも作り、異文化との交流と共生を実現する場も提供していきたいと考えている。

謝　辞

本調査は、国立大学法人 お茶の水女子大学 学生支援センター「文部科学省特別経費プロジェクト・統合型学生支援システムの構築による女子高等教育機会の保証」（詳細は、http://www.ocha.ac.jp/gss/index.html を参照）に関わる調査の一環として行われた。ここに記して感謝の意を表すものである。

註

お茶大SCCは、2011年度グッドデザイン賞（住宅部門）を受賞した。授賞理由として、「学生寮として、集団で生活することの社会的な意味を、平面計画に積極的に提案している点を評価したい」との評価をいただいた。

著者の桂は、平成24年度まで、学寮アドバイザーとしてお茶の水女子大学学生支援センターに所属していた。

引用文献

赤坂瑠以（2010）.「アメリカの大学の学生寮視察調査：本学の学生寮への提案」『高等教育と学生支援―お茶の水女子大学教育機構紀要―』1: 49–55.（URL　http://hdl.handle.net/10083/50680）

桂瑠以（2013）.「学生寮調査報告―学生寮の生活環境及び人間関係に着目して―」『高等教育と学生支援―お茶の水女子大学教育機構紀要―』3: 30–42.（URL　http://hdl.handle.net/10083/52927）

鈴木杏理・元岡展久・桂瑠以（2012）.「女子大学学生寮における寮室と共用空間の構成」『高等教育と学生支援―お茶の水女子大学教育機構紀要―』2: 14–21, 2012.（URL　http://hdl.handle.net/10083/51764）